

若い瞳



宇都 正 幸

ここ数年、出張講義という形で年に4回くらい北海道や東北の高校にお邪魔させていただいています。20人程度のクラスから学年全体240名くらいの規模まで、主に1,2年生に対して様々な形態でお話しさせていただくのですが、毎回、生徒さんたちのキラキラした視線にこちらが気圧されてしまいます。

分析化学の話題を中心に“研究”の面白さや難しさなどを交えながら、高校の物理や化学、生物で学んでいる知識との関係を紹介するお話をするわけですが、理系クラスの生徒だけに限らず、学年全体の場合でもその好奇心に満ちた表情は生き活きとして、熱心に話に聞き入ってくれます。そして、講義後の感想文などを後日読ませていただくと、的確にこちらの意図を理解した上での意見や分析化学に対する興味が綴られています。もちろん高校の先生方が選別して送ってくださっているであろうことは容易に想像できるのですが・・・それでも、講義中の手応え、生徒さんたちの表情を思い起こすと、ひと頃騒がれた理科離れってほんとうだろうか？とさえ思ってしまうのです。

翻って、大学で行っている自分の講義でそんな熱視線を浴びることができているかという、然に^さあらず。睡魔と戦う健気な学生もいれば、すでに白旗を掲げてしまった学生もちらほら。キラキラの視線を送ってくれている学生の割合は、残念ながらあまり自慢できるものではありません。まさに理系の学生たちが集まっているはずなのに・・・

この差はいったいなんなのだろう？ と戸惑ってしまいます。

おそらく・・・日常と非日常、受講生の意識の差に起因するところが大きいと思いたいのですが。

新鮮さ。毎日、あるいは毎週の繰り返しの中で顔を合わせる自校の教員と初めて顔を見るお客さまの講師に対する感受性の差。さらに話題の中身が教科書や試験に束縛されていないところに新鮮さや面白さを感じてもらっているのだろうと思いますし、なにより分析化学が面白いからこそ生徒たちの瞳が輝いてくれるのだろうと。ところが、毎週の講義はどうしても基礎的な知識の提供や処理作業の習練に偏ってしまい、新しい知識を獲得することに対する充足感や未来へ向かう高揚感がどうしても薄くなってしまわないかと思いつたのです。

常に新しい課題に取り組み、解決していくことで科学技術の進歩に貢献してきた分析化学という学問・技術を、若い人たちの瞳にちゃんと伝えられているのだろうか？ という思いが胸をよぎります。

“最近の学生は”あるいは“ゆとり世代は”という世代を一括りにした表現はいつの時代にも使われます。確かに時代に沿った意識や感性の変化が各世代の共通要素として刷り込まれている部分はあると思いますし、世代が違っても相互理解が難しくなることもあるかもしれません。しかし、知的好奇心はどの世代にも共通で、人の心を揺さぶり、瞳を輝かせる心であることは間違いありません。

次を担う若い人たちの瞳に分析化学の“面白さ”を伝えていきたいですね。

[Masayuki Uro, 北見工業大学マテリアル工学科, 日本分析化学会北海道支部長]